

令和4年度 メディア芸術連携基盤等整備推進事業
分野別強化事業

マンガ原画アーカイブセンターの実装と
所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究
実施報告書

一般財団法人横手市増田まんが美術財団

令和5年2月

目次

第1章 事業概要	3
1.1 事業の目的	3
1.2 今年度事業の目的	4
1.3 実施体制	5
1.4 実施内容	6
1.5 実施スケジュール	8
1.6 会議スケジュール	9
第2章 成果・課題・評価	10
2.1 成果	10
2.1.1 MGACの実装	10
2.1.2 所蔵館ネットワークの構築	10
2.1.3 専門人材の育成	10
2.1.4 収益事業及び支援体制構築の調査	11
2.1.5 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての原画／刊本事業の合同 会議開催	11
2.2 課題	12
2.3 評価	13
第3章 実施内容	14
3.1 実施内容	14
3.1.1 相談窓口の活動	14
3.1.2 所蔵館ネットワークの構築	20
3.1.3 専門人材の育成	23
3.1.4 収益事業及び支援体制構築の調査	23
3.1.5 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての原画／刊本事業の合同 会議開催	26

目次

3.2 実施会議内容	29
3.2.1 運営協議会	29
3.2.2 各部門実施会議内容	30
付録	33
1 「ゲンガノミカタ」小冊子（一部抜粋）	33
2 保存者別原画アーカイブマニュアル作成のための取材報告書	35
2.1 株式会社手塚プロダクションへの取材報告書	35
2.2 エ☆ミリー吉元氏への取材報告書.....	40

第1章 事業概要

1.1 事業の目的

マンガ分野では、「研究機関等におけるメディア芸術作品のアーカイブ化」を支援し、所蔵情報などの整備を推進するとともに、産・学・館（官）の連携・協力により、分野・領域を横断して課題解決に取り組む。具体的には、マンガの原画と刊本（雑誌・単行本）とを対象を大別し、前者に関しては、横手市増田まんが美術館を「マンガ原画アーカイブセンター（以下、MGAC）」の担い手として実装しつつ、後者に関しては、熊本大学を「マンガ刊本アーカイブセンター」の将来的な担い手に想定し、統合的かつ体系的な「マンガのアーカイブ」の連携基盤整備を推進してきた。

これまでも、原画／刊本両事業は、“車の両輪”として協力しつつ作業を行ってきたが、今年度は、以下の事業を推進するため、共通課題を抽出した共同会議を実施するなど、将来的な合流——「マンガアーカイブ機構（仮称）」の設置を目指した具体的な事業を設定する。

- ① 日本のポップカルチャーの象徴であり、メディア芸術の核となるマンガの資料群（原画、刊本）の保存に関して、標準的・体系的な方法の確立に向けた調査研究を行う。全国の所蔵館と情報共有できる体制を整えるために、原画保存に関する相談窓口等を設けるとともに、所蔵館連携ネットワークの構築と強化を進める。
- ② 本事業は、将来的なメディア芸術の中核拠点形成に向けた構想の実現を視野に入れることで、マンガに限らず、メディア芸術各分野の先行モデル・ケーススタディとなることを想定し、中期的に計画している。そのため、事業を通じて得られる課題の発見や解決のための情報・知見、そして人材については、広範に共有すべく、事業実施プロセス自体を可視化・アーカイブするための調査研究を始める。
- ③ メディア芸術連携基盤等整備推進事業（以下、連携事業）の趣旨を踏まえ、メディア芸術データベースにおいて許諾を得られた作品の情報や原画・刊本の存在の発信を通じ、広く国内外に向けて、マンガをはじめとするメディア芸術各分野の価値創造に関して問題提起するための調査研究を行う。これに際しては、作家本人やその関係者、出版社など「産」との連携の在り方を丁寧に検討する。

第1章 事業概要

1.2 今年度事業の目的

① マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携に向けた調査研究

事業計画とロードマップの策定に向けた基礎調査として、連携事業における有識者検討委員のアドバイスなどを受けながら、以下テーマを実施する。

- ・相談窓口の開設：窓口設置（電話、HP等）、出版社及び日本漫画家協会などの関係機関を中心とした外部への宣伝活動、相談カルテと処方箋の作成・発行、緊急保護が必要な原画資料の一時保護及びその移管作業
- ・所蔵館ネットワークの構築：ネットワーク強化に向けた新たな参画館の確保、連絡会議の調整と開催、連携館による「原画プール」の実践研究、収蔵相談等調査依頼の受入れと調査員の派遣
- ・専門人材の育成：保存者別「原画アーカイブマニュアル」の構築研究、保存・修復等専門機関との合同研究
- ・収益事業及び支援体制構築の調査：所蔵館の収蔵原画を活用した展示・出版等の立案、ゲンガノミカタ展の巡回支援、将来的な自走化に向けた支援金募集・受入れ体制の検討
- ・「集英社マンガアートヘリテージ（以下、SMAH）」との連携による原画保存に関する共同研究の実践
- ・著作権管理等に関する合同税務学習会の開催：原画等の権利保有者及び著作権管理者などを対象とした税務学習会を、外部講師を招いて開催

② 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての原画／刊本事業の合同会議開催（実施期間：年6回開催）

マンガの原画と刊本は、資料の価値付けや活用方法において表裏一体の関係にある。両者のアーカイブについてそれぞれ考えてきた原画／刊本両事業の将来的な合流——「マンガアーカイブ機構（仮称）」の設置を目指し、両者の共通課題を抽出した共同会議を実施する。

第1章 事業概要

1.3 実施体制

本事業は、「MGAC」を中心として全国の所蔵館・マンガ関連施設に関わる学芸員、研究者などの参画により実施された。

今年度の事業内容の詳細に応じて、「MGAC 運営協議会」、「マンガ原画アーカイブネットワーク部会」、「マンガ原画アーカイブマニュアル検討部会」、「収益・支援体制構築部会」の4部会を設置し、メンバーがそれぞれいずれかの部会に属して研究や事業の推進を図った。

表 1-1 参加メンバー一覧

役職	名前	所属
コーディネータ	大石 卓	横手市増田まんが美術館 館長
アドバイザー	吉村 和真	京都精華大学 専務理事
アドバイザー支援	イトウ ユウ	京都精華大学マンガ学部 特任准教授
メンバー	表 智之	北九州市漫画ミュージアム
	ヤマダ トモコ	明治大学米沢嘉博記念図書館
	池川 佳宏	熊本大学国際マンガ学教育研究センター 研究員
	木村 仁	株式会社街づくりまんぼう（石ノ森萬画館指定管理会社）
	隅 淳子	鳥取県北栄町 観光交流課 観光戦略室
	岩野 浩平	熊本県湯前町教育委員会 教育課 社会教育係
	倉持 佳代子	京都国際マンガミュージアム

連携機関：青山剛昌ふるさと館、石ノ森萬画館、北九州市漫画ミュージアム、京都国際マンガミュージアム、明治大学米沢嘉博記念図書館、湯前町立湯前まんが美術館（那須良輔記念館）、横手市増田まんが美術館 [50音順]

第1章 事業概要

1.4 実施内容

1) MGACの実装

マンガ原画の保存については、これまで国内に専門の窓口などは設置されておらず、原画に関わる漫画家や遺族、著作権者や編集者などが、それぞれの人脈の中で、国内のマンガ関連施設を中心に保存の相談をする流れとなっていた。こうした中、いち早く体系的な原画収蔵とアーカイブに取り組んできた横手市増田まんが美術館内の実績が評価され、その知見を最大限発揮する形で、横手市増田まんが美術館内に令和2年度にMGACを設置し、国内初の原画保存相談窓口を開設した。

今年度もこれまでの2か年の窓口開設実績を元に、専用の電話回線及びウェブサイトを用意した上で、電話・FAX・Eメールなどによる相談を受け付けるとともに、関係のあるマンガ編集者等を介して、漫画家へのMGACの広報を依頼するなど、窓口設置の認知拡大を図った。また、10月からはMGACの活動拠点を隣接する増田の町並みにある「漆蔵資料館」に移設し、広報の強化とプール原画の保存能力強化に取り組んだ。

2) 所蔵館ネットワークの構築

これまでの調査研究で蓄積した原画保存のノウハウを共有し、原画保存に取り組む強固な連携体制の構築を目的に設置した「マンガ原画アーカイブネットワーク協議会」を継続し、協議に当たった。メンバーは、行政運営や指定管理者、学校法人など、産官学それぞれの運営形態を取る施設や研究者によって構成された。会議は7月と11月の2回開催し、連携機関間の情報交換を行ったほか、昨年度に引き続き、青山剛昌ふるさと館の再整備を検討している鳥取県北栄町との連携協議を行った。また、昨年度から実施している連携館による「原画プール」については、引き続き石ノ森萬画館（宮城県石巻市）と横手市増田まんが美術館の2館で、12作家のマンガ原画約131,000枚をプールした。

3) 専門人材の育成

マンガ原画アーカイブの啓発普及と、それに関わる人材の育成を目的として、連携館が持つ知見を集約した「マンガ原画アーカイブマニュアル」の改善を引き続き行っているが、更なる充実を目的に、昨年度に引き続き、保存者別マニュアルの構築研究を行った。マンガ原画アーカイブマニュアル部会を構成し、部会員による検討会議を6月と令和5年1月に開催し、今後のマニュアル作成の方向性や作成したマニュアルの使用等について協議を進めた。

4) 収益事業及び支援体制構築の調査

これまでの取組において、横手市増田まんが美術館がリニューアルオープン企画として令和元年5月に開催した「ゲンガノミカタ展」の巡回パッケージ化を進めてきた。今年度は「ゲンガノミカタ展」の原画鑑賞における解説テキストをほかの作家作品に置き換えて展示構築するモデルケースとして、令和4年6月2日から8月29日に京都国際マンガミュージアムにおいて開催された「描く人 谷口ジロー展」へ解説テキストを提供。様々なマンガ原画の展示に「ゲンガノミカタ展」が活用できるよう応用力を高める取組を展開した。

第1章 事業概要

5) 「SMAH」との連携による原画保存に関する共同研究の実践

昨年度の事業で、SMAHの原画整理とアートブロックチェーンを活用した高精細プリント作品の製作販売事業を取材した。これを受けて今年度は、整理後の原画保存の方法や保存原画の利活用についての意見交換を行った。

6) 著作権管理などに関する合同税務学習会の開催

かねてマンガ関係者から要望が強かった「著作権等に関する税の取扱い」について、専門家からの講義を受ける研修会を8月にオンラインで実施。研修会は、原画及び刊本の合同研修会として、第3回アーカイブ協議会の事業として行った。講師として、公認会計士・税理士の山内真理氏、一般財団法人さいとう・たかを劇画文化財団理事長の山内康裕氏をお招きし、著作権の継承に係る税制度や原画などの作品を含めた相続税の問題、著作権者における会計上の税務処理等について、詳しく解説を頂いた。

7) 「マンガアーカイブ機構(仮称)」設立に向けての原画／刊本事業の合同会議開催

4月のキックオフミーティングを皮切りに、前述の合同研修会を含め、全6回の共同会議を開催。原画分野と刊本分野、それぞれのアーカイブに対する考え方及び課題等を整理し、早期の合流に向けた調整が図られた。

第1章 事業概要

1.5 実施スケジュール

実施期間：令和4年4月1日～令和5年2月28日

スケジュール	4月	5月	6月	7月	8月	9月
全体事業					自治体連携会議① 8/31 (WEB)	
原画・刊本合同	マンガアーカイブ 協議会① 4/15 (WEB)		マンガアーカイブ 協議会② 6/20 (横手)		マンガアーカイブ 協議会③ 8/5(WEB)	
マンガ原画 アーカイブセンター (MGAC)	業務全般 アーカイブ実務研修 など					→
運営協議会			運営協議会① 6/13 (WEB)			
ネットワーク会議部会				ネットワーク会議① 7/15 (WEB)		
マニュアル検討部会			アーカイブマニュアル 検討会議① 6/20 (横手)			
収益・支援体制 構築部会						

図1-1 部会ごとの会議日程一覧（前期）

スケジュール	10月	11月	12月	1月	2月
全体事業	中間報告会 10/13 (WEB)			報告書とりまとめ 自治体連携会議② 1/24 (WEB)	最終報告会 2/20 (WEB)
原画・刊本合同	マンガアーカイブ 協議会④ 10/14 (WEB)		マンガアーカイブ 協議会⑤ 12/10 (熊本)		マンガアーカイブ 協議会⑥ 2/1 (WEB)
マンガ原画 アーカイブセンター (MGAC)	業務全般 アーカイブ実務研修 など				実績報告書 提出
運営協議会					運営協議会② 2/1 (WEB)
ネットワーク会議部会		ネットワーク会議② 11/4 (鳥取)			
マニュアル検討部会				アーカイブマニュアル 検討会議② 1/26 (WEB)	
収益・支援体制 構築部会			収益・支援体制構築 会議① 12/10 (熊本)	収益・支援体制構築 会議② 1/24 (WEB)	

図1-2 部会ごとの会議日程一覧（後期）

1.6 会議スケジュール

1) MGAC 運営協議会

第1回 令和4年6月13日(月) 18:30~20:30

第2回 令和5年2月1日(水) 14:00~15:40

2) マンガ原画アーカイブネットワーク会議

第1回 令和4年7月15日(金) 10:30~12:00

第2回 令和4年11月4日(金) 15:00~17:00

3) マンガ原画アーカイブマニュアル検討会議

第1回 令和4年6月20日(月) 13:30~14:30

第2回 令和5年1月26日(木) 14:00~15:30

4) 収益・支援体制構築会議

第1回 令和4年12月10日(土) 17:30~18:30

第2回 令和5年1月24日(火) 10:00~11:30

5) マンガアーカイブ協議会

第1回 令和4年4月15日(金) 16:30~18:30

第2回 令和4年6月20日(月) 10:00~12:00

第3回 令和4年8月5日(金) 16:30~18:00

第4回 令和4年10月14日(金) 15:00~17:00

第5回 令和4年12月10日(土) 10:00~11:40

第6回 令和5年2月1日(水) 15:50~17:30

第2章 成果・課題・評価

2.1 成果

2.1.1 MGACの実装

相談窓口を開設して3年目となる今年度は、これまで横手市増田まんが美術館内に併設していた活動拠点を、美術館に隣接する国の重要的建造物群保存地区「増田の町並み」にある「漆蔵資料館」へ移設し、専用施設での活動周知強化に取り組めた。具体的には、資料館内にある内蔵を活用し、マンガアーカイブセンター（以下、MGAC）の機能紹介やこれまでの活動実績をパネルにて紹介。また、昨年度の事業で製作した原画保存に関する啓発動画を流すなど、マンガ原画のアーカイブ推進についての現状を広く周知できた。

相談対応としては、前年度から継続している25件の相談案件に加え、新たに13件の相談を受け、計38件の相談に対応した。内訳は、直接の聞き取り調査が6件、電話やメール等を介しての調査が19件、継続及び今後の調査依頼相談が13件となった。この中でも特に昨年度から実施した原画プール事業に関しての要望が高く、13件の原画プールを実施。緊急保存の必要な原画の救済や著作権継承者が抱える保存問題の解決に対処できた。

2.1.2 所蔵館ネットワークの構築

昨年度に引き続き、連携館による「マンガ原画ネットワーク会議」を2回開催。このうち11月に開催した第2回会議は、青山剛昌ふるさと館の再整備を検討している鳥取県北栄町において対面で開催し、細やかな情報交換を実現できた。また、昨年度から取り組んでいる「原画プール」については、計141,000枚の原画をプールしたが、このうち、北九州市漫画ミュージアムが調査に当たったムロタニツネ・象氏の原画約10,000枚については、同館への収蔵が決定するなど、保管先を解決する実績を残せた。このほか、京都在住漫画家の原画プール対応に、京都国際マンガミュージアムの関係者が立ち会い引渡しを受けるなど、ネットワークを生かした活動を展開した。

2.1.3 専門人材の育成

これまでの事業で整備してきた「マンガ原画アーカイブマニュアル」の更なる充実と保存者別マニュアルの構築を目的に、調査研究に当たった。昨年度実施した集英社マンガアートヘリテージ（以下、SMAH）におけるアーカイブヒアリングに加え、法人として原画保存に当たっている手塚プロダクションと作家個人として原画を保管しているバロン吉元氏を取材した。このヒアリングにより、保存者別に保管に対する実務的な取組に幅のある実態を再認識した結果、どちらかと言えば、施設での保管向けの性質を持っている「マンガ原画アーカイブマニュアル」の内容をベースとしながら、来年度以降、「保存者別マニュアル」をまとめる結論に至った。

第2章 成果・課題・評価

2.1.4 収益事業及び支援体制構築の調査

これまでの取組において、横手市増田まんが美術館がリニューアルオープン企画として令和元年5月に開催した「ゲンガノミカタ展」の巡回パッケージ化を進めてきた。今年度の新たな取組として、「ゲンガノミカタ展」の原画鑑賞における解説テキストをほかの作家作品に置き換えて展示構築するモデルケースとして、令和4年6月2日から8月29日に京都国際マンガミュージアムにおいて開催された「描く人 谷ロジロー展」へテキストを提供。様々なマンガ原画の展示に「ゲンガノミカタ展」を活用できるよう応用力向上の取組を展開した。また、MGACの新たな活動拠点となった漆蔵資料館の内蔵〔うちぐら〕2階においても、令和4年10月～令和5年1月まで「ゲンガノミカタ展」を開催し、啓発活動を強化した。さらには、上記テキストを中心とした小冊子「ゲンガノミカタ マンガ原画を100倍楽しむ法」の監修協力も行い、収益強化と原画保存の理解者を増やす取組も実践できた。

2.1.5 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての原画／刊本事業の合同会議開催

マンガ分野における原画事業と刊本事業の早期合流に向け、年6回の合同会議（研修含む）を開催したが、それぞれの会議において有意義な意見交換がなされた。特に6月に開催した第2回会議には、講談社・森田専務取締役を迎え、産との連携という角度から両事業のアーカイブの方向性について貴重な意見を頂けた。また、第3回会議では、マンガ原画の寄贈や相続に関する税務研修を、第4回会議では、マンガ分野におけるデータベース構築に向けた勉強会を開催。それぞれ第一線で活躍されている専門家から貴重な意見を聴講できた。こうした取組において、合流に向けた機運や一体感の醸成が図られたことが最大の効果であったと言える。

2.2 課題

1) MGACの実装

これまでMGACの認知拡大の取組を展開してきたが、飛躍的に相談案件が増大している訳ではない。様々な漫画家や著作権者の意見を聞く中で、「自分の原画よりもほかの有名作家や評価の高い作品を守ってほしい」との声が多く、言わば自身は一步下がり、業界全体での保存推進を願う気持ちが根底にあるのが一因と推測される。しかしこうした状況下でも、原画保存の重要性を更に広く理解していただく広報活動の重要性を感じている。また、昨年度も課題として挙げているように、プール原画の整理にはいまだ着手できていない。プールした原画の保存先を斡旋[あっせん]・決定する活動に際し、最低限の整理情報は必須であり、早急に対応する重要性は更に増しているため、その予算確保や業務構築に向けた対応が急務である。

2) 所蔵館ネットワークの構築

昨年度の課題として、ネットワーク会議に参画するための組織作りや規約整備等を挙げた。このネットワーク会議自体も、刊本との早期合流を目指して活動している「マンガアーカイブ機構(仮称)」への一本化が自然な流れと感じているため、今後のメンバーシップの議論は、刊本との合同会議の場へのシフトにより対処したい。また、プール原画の保存先として、今年度も石ノ森萬画館の協力を得ながら対処しているが、集積能力確保の観点からも、更なる協力館の確保も急務である。前述のプール原画整理の進行と合わせ、より原画保存に協力しやすい環境の整備に当たる。

3) 専門人材の育成

今年度の目標として、「保存者別原画アーカイブマニュアル」の整備を掲げていたが、結果として完成できなかったのは、大きな反省点である。しかしながら、今年度、プロダクションや個人管理の状況を調査・ヒアリングした中で、当初想定していた内容より、より保存者別に繊細な仕訳や設定が必要と確認できたため、今後は最終調整を急ぎ、早期のマニュアルの公開につなげたい。

4) 収益事業及び支援体制構築の調査

京都国際マンガミュージアムにおいて開催された「描くひと 谷口ジロー展」で構築された「谷口ジロー版ゲンガノミカタ」コーナーは、作家の様々なマンガ原画の展示に「ゲンガノミカタ展」を活用できる応用力の高さを示したが、パッケージとして、他施設での開催は実現できなかった。様々な構築条件にカスタマイズが可能な「ゲンガノミカタ展」の魅力を存分にアピールできていないとも言え、広報拡大に対する意識向上の必要性を感じている。また、パッケージ以外の収益の附帯については、成功例を積み上げているSMAHとの連携や共同事業の実践を軸に、今後のマネタイズ強化につなげていきたい。

5) 「マンガアーカイブ機構(仮称)」設立に向けての原画/刊本事業の合同会議開催

原画事業と刊本事業の早期合流を目指した取組の中で、有益な意見交換や意思確認等がなされたの

第2章 成果・課題・評価

は大きな成果ではあったが、両分野がそれぞれ抱えている課題を整理し、より具体的な合流のゴールラインを設定するには至らなかった。引き続き刊本アーカイブセンターの早期設置を支援し、スムーズな合流に向けた準備に連携して当たりたい。

2.3 評価

今年度の実施内容を踏まえた成果と課題については、過不足なく上記の通りであるが、より俯瞰[ふかん]的な視点から評価するならば、いずれの項目・内容も体系的なつながりが更に明瞭になってきた点をまずもって高く評価したい。つまり、このマンガ原画アーカイブに関する事業計画と実施内容が一体的に符号化してきている現状を示すとともに、本事業全体の重要性がますます増している状況を意味している訳だが、その意味において、体系的な活動を一元的に管理運営する拠点としてのMGACの移転・強化の実現は、とりわけ今年度の大きな成果と言える。

ただし、裏を返せば、それぞれの実施内容に付随する管理責任やネットワーク構築への期待も高まる。したがって、原画プールや専門人材の育成など、マンガ原画の収集・保存・活用をリードする役割はもちろんのこと、MGACの持続発展性の担保に大きな責任と可能性を持つことになるため、「収益事業及び支援体制構築」も調査の段階から強化の域に進むための計画と実践が必要となるだろう。

以上を踏まえると、やはり「マンガアーカイブ機構（仮称）」の設立が肝となるのは明白である。そのためには刊本事業との様々な協働が必要となるが、来年度事業はもちろんのこと、中長期的な視野をもって、それぞれの実施内容を更に着実に前進されることを期待したい。

第3章 実施内容

3.1 実施内容

3.1.1 相談窓口の活動

【体制】

マンガ原画アーカイブセンター（以下、MGAC）

- ・センター長 大石 卓（横手市増田まんが美術館 館長）
- ・主任スタッフ 安田 一平（一般財団法人横手市増田まんが美術財団）
- ・スタッフ 佐藤 優子（同上）
- ・スタッフ 佐藤 祐花（同上）



図3-1 美術館内に設置されたMGAC事務所（令和4年4月～9月末まで）

第3章 実施内容

【事務所の移転】

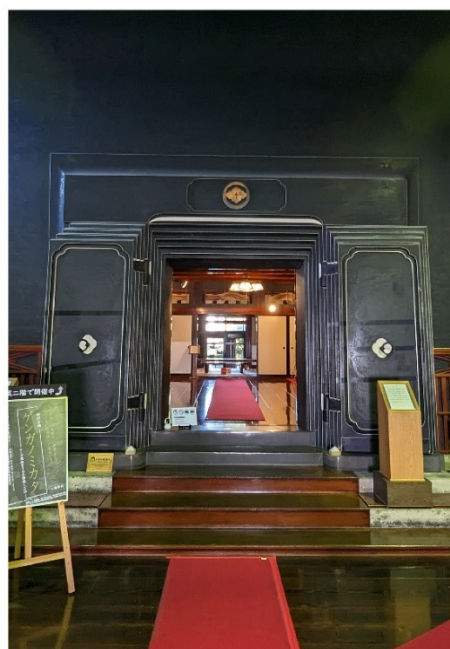
令和4年10月2日よりMGAC事務所及び活動拠点を、隣接する重要な建造物群保存地区（増田の街町並み）にある「佐藤養助漆蔵資料館」へ移設。これにより、MGACの活動内容の周知が強化されるとともに、保存集積能力の強化にもつながった。



移設したマンガ原画アーカイブセンターの外観（佐藤養助漆蔵資料館）



外看板の様子



センター内、内蔵の様子

図3-2 移転後の事務所の様子①

第3章 実施内容



内蔵の内部を活用した、MGACの活動紹介の様子



マンガ原画保存に関する啓発動画を紹介するコーナー

図3-3 移転後の事務所の様子②



マンガ原画アーカイブセンター
MANGA GENCA ARCHIVE CENTER

2020年度 メディア芸術連携基盤等整備事業



▶ ホーム ▶ マンガ原画アーカイブセンター ▶ 運営協議会 ▶ マンガ原画アーカイブネットワーク会議 ▶ 収益・支援体制構築会議 ▶ マンガ原画アーカイブマニュアル検討会議

2022.9.26

MGAC事務所 移転のお知らせ

平素は格別のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。
 この度、マンガ原画アーカイブセンターは2022年10月2日（日）に新住所に移転し、新事務所において運営を開始する運びとなりましたのでご案内申し上げます。

■ 移転先住所
 〒019-0701
 秋田県横手市増田町増田字本町5 番地
 ※電話番号・FAX番号に変更はございません



移転先となる地域は、横手市増田伝統的建造物群保存地区に指定されており、新たな事務所にも国登録有形文化財に登録されている「内蔵」を有しております。

■ 横手市増田伝統的建造物群保存地区・内蔵について…外部サイト（横手市ホームページ）

移転を機に、この「内蔵」を活用しました原画保存の取り組みを行い、皆様のご期待に沿えるよう努力してまいります。今後とも皆様のご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



※新事務所「内蔵」の様子

図3-4 事務所移転に関する告知（MGAC HP 掲載）

▶ お問合せフォーム

下記の注意事項をよくお読みの上、お問合せください。

※注意事項

原画保存にお悩みの方の相談を受け付けておりますが、「原画の保管（お預かり等）」を保証するものではありませんので、予めご了承ください。

承認して表示

【お名前】 必須

【住所】 必須

都道府県まででも可

【メールアドレス】 必須

【連絡先】

【相談内容】 必須

【その他】

お電話での連絡希望時間等ございましたらご記入ください

入力内容を確認の上、よろしければ「送信する」ボタンを押してください。

送信する

図 3-5 相談に関するお問合せフォーム（HP 掲載）

第3章 実施内容

【相談依頼内容】

■マンガ原画アーカイブセンター 相談件数と対応状況

①令和2・3年度の相談内訳

直接ヒアリング（対面）	・・・	7件
電話・メール等相談	・・・	11件
調査依頼（未ヒアリング）	・・・	13件
		合計 31件

- ・原画プール対応・・・・・・・・・・・・・・・・ 6件（相談解決）
- ・継続協議（管理手法相談、プール調整含む）・・・ 25件

25件の相談を引き継ぎ、令和4年度事業へ移行



②令和4年度の相談内訳（新規）

直接ヒアリング（対面）	・・・	2件
電話・メール等相談	・・・	11件
調査依頼（未ヒアリング）	・・・	0件
		合計 13件

令和2・3年度を含め、計38件の相談に対応した



③相談内容内訳

- ・原画保存相談・・・・・・・・ 36件
- ・原画管理手法相談・・・・・・ 2件 合計 38件



④令和4年度末相談処理状況

- ・原画プール及び収蔵対応・・・・・・・・ 12件（相談解決）
- ・継続協議（管理手法相談、プール調整含む）・・・ 26件

※相談協議の26件については、引き続き解決に向けた調整を図る

図3-6 今年度相談件数と対応状況

第3章 実施内容

3.1.2 所蔵館ネットワークの構築

主なマンガ関連施設におけるマンガ原画収蔵・プールの状況

(MGAC調査)

施設名	横手市増田まんが美術館	京都国際マンガミュージアム	北九州市漫画ミュージアム
施設外観			
収蔵・プール枚数	約45万枚	確認作業中	約10万枚
現在の収蔵状況 収蔵に対する 考え方	地元出身漫画家を中心に、関係性のある漫画家や編集者からの紹介など、市の公費を投じてアーカイブする作家を厳選しながら積極的な収蔵を展開してきた。その結果、令和3年度末で45万点を超える原画を収蔵している。	刊本（雑誌・単行本）のアーカイブを中心とした施設であり、さらに収蔵スペースの問題も有り、現在、大規模な原画収蔵の積極的な取り組みは行っていない。ただし数名の作家に関しては、実験的に、ほぼすべての原画を受け入れている。本年度も、寄贈の申し出は数件あったが、同館資料の受け入れの検討機関である「京都精華大学国際マンガ研究センター」の判断で、すべてMGACに話を回した。受け入れ済みの原画に関しては、それらを元にした出版企画が実現したり、個展の企画が提案されたりする等、活用が進みつつある。	北九州ゆかりの漫画家の業績の顕彰を目的に開設。ゆかり作家の内、本人や家族による管理が難しいケースを優先して原画を受け入れ、現在約10万枚を収蔵中。今年度はムロタニ・ツネ象の原画約1万枚を受け入れ、北九州の新聞漫画を題材とする秋季企画展でお披露目。今後も受け入れを続けるが、北九州ゆかりの作家・作品を原則としている。
今後の方針 懸案事項	館のキャパシティである70万点に対し、既に45万点を超える原画が収蔵されており、加えて、原画プールとして12万点を超える原画を保管していることからスペース確保の議論を進める必要がある状態。	受け入れた原画に関して、整理を進める体制は整えたが、データベースの構築や最終的な収蔵場所の確保は実現できていない。	文月今日子の原画収蔵に向けた受入が進行中。収蔵庫のキャパシティが限界を迎え、整頓方法の工夫や収蔵スペースの別途手配が喫緊の課題。常設展の原画展示機能の拡充など、利活用の機会を増やし、整頓の進捗促進を図る。
施設名	明治大学米沢嘉博記念図書館	石ノ森萬画館	
施設外観			
収蔵・プール枚数	1400枚	99,000枚	
現在の収蔵状況 収蔵に対する 考え方	図書館ではあるが鈴木光明の寄贈原画1400枚や、高橋しん作画資料などを有す。2021年春、現代マンガ図書館との複合的運用を開始。方向性に変更はなし。1階が展示スペースであり、マンガの原画展を頻繁に行っていることから、原画の整理・保管作業等の協力を行っている（三原順など）。図書館としての蔵書数約14万冊、アニメ原画収蔵約50箱分。	2011年の東日本大震災により被災するまでは、石ノ森草太郎の原画約9万点を保管し、アーカイブ作業を行っていた。震災後、大半を返却したことから、保管スペースが空いており、原画プール事業に対応できた。令和4年度も追加での原画プールに協力している。	
今後の方針	収蔵スペースの関係もあり、現在マンガ原画の収蔵計画は無し。収蔵済み原画の整理を進める予定。	今後、関係性のある作家や作品の原画保管の予定もあるが、アーカイブセンター事業との連携に協力していく考え。	

図 3-7 保存レベルの現状一覧表

第3章 実施内容

表 3-1 会員資格の設定案

マンガ原画アーカイブネットワーク協議会 会員資格の設定（案）

グループ	会員資格の設定	該当施設
1	マンガ原画アーカイブセンター運営協議会に籍を置く施設	<ul style="list-style-type: none">・横手市増田まんが美術館・京都国際マンガミュージアム・北九州市漫画ミュージアム・明治大学米沢嘉博記念図書館
2	マンガ原画アーカイブネットワーク協議会に籍を置く施設	<ul style="list-style-type: none">・石ノ森萬画館・青山剛昌ふるさと館・湯前まんが美術館（那須良輔記念館）
3	ほか、マンガ関連施設及び原画収蔵可能な機能を有する施設	<ul style="list-style-type: none">・全国マンガ関連施設・美術館、博物館等の公共施設など

【ネットワーク拡大に向けた取組】

昨年度の事業で「ゲンガノミカタ展」を開催した高知まんが BASE を訪問し、刊本事業との連携の様子を確認したほか、今後の連携についても協議を行った。また、高知市が設置している「横山隆一記念まんが館」を訪問し、原画保存の状況についてのヒアリングと今後の連携についての意見交換を行った。

第3章 実施内容

【原画プールの状況】

表 3-2 原画プール対応状況の詳細

■R3年度プール実績

NO.	作家名	代表作	相談者	相談区分	相談手法	保管希望先	プール 収蔵先	原画数(概算)
1	川本コオ	鯨魂	親族(ご息女)	保存	メール・電話	指定なし	石ノ森萬画館	15,000 枚
2	山田芳裕	へうげもの	編集者	保存	対面	指定なし	石ノ森萬画館	14,000 枚
3	花村えい子	霧のなかの少女	原画管理者 親族(ご息女)	保存	メール・電話 対面	横手市増田 まんが美術館	横手市増田 まんが美術館	30,000 枚
4	東條仁	CUFFS ～傷だらけの地図～	編集者	保存	メール・電話	指定なし	石ノ森萬画館	12,000 枚
5	なきぼくろ	バトルスタディーズ	編集者	保存	対面	指定なし	石ノ森萬画館	4,000 枚
6	山崎大紀	千代の富士物語	本人	保存	メール・電話	指定なし	石ノ森萬画館	10,000 枚
合計								85,000 枚

■R4年度プール・収蔵実績(令和5年1月31日現在)

NO.	作家名	代表作	相談者	相談区分	相談手法	保管希望先	プール 収蔵先	原画数(概算)
1	山崎大紀(追加分)	千代の富士物語	本人	保存	メール・電話	指定なし	石ノ森萬画館	18,000 枚
2	松浦まさふみ	機動戦士ガンダム ムーンクライシス	本人	保存	メール・電話	指定なし	石ノ森萬画館	1,000 枚
3	高井研一郎	総務部総務課山口六平太	親族	保存	メール・電話	指定なし	石ノ森萬画館	15,000 枚
4	霜月かいり	BRAVE10	本人	保存	メール・電話	指定なし	石ノ森萬画館	10,000 枚
5	玖保キリコ	いまどきのこども	編集者	保存	メール・電話	横手市増田 まんが美術館	横手市増田 まんが美術館	12,000 枚
6	オキモト・シュウ	神の雫	編集者	保存	メール・電話 対面	横手市増田 まんが美術館	横手市増田 まんが美術館	15,000 枚
7	ムロタニ・ツネ象※	漫画日本史	親族・関係者	保存	メール・電話 対面	北九州市漫画 ミュージアム	北九州市漫画 ミュージアム	10,000 枚
8	秋里和国	THE B.B.B.	本人・編集者	保存	メール・電話	指定なし	横手市増田 まんが美術館	8,000 枚
9	山本夜羽音	マルクスガール	親族	保存	メール・電話	指定なし	横手市増田 まんが美術館	8,000 枚
10	原ちえこ	三つのブランコ物語	本人	保存	メール・電話	横手市増田 まんが美術館	横手市増田 まんが美術館	25,000 枚
11	士崎雅雪	いけいけ! ねころメイド	本人	保存	メール・電話 対面	横手市増田 まんが美術館	横手市増田 まんが美術館	1,000 枚
12	谷岡ヤスジ	ヤスジのメッタメタガキ道講座	親族	保存	メール・電話	横手市増田 まんが美術館	横手市増田 まんが美術館	15,000 枚
13	楠本まき	KISSxxxx	本人	保存	メール・電話 WEB会議	横手市増田 まんが美術館	横手市増田 まんが美術館	3,000 枚
合計								141,000 枚

※印の作家は連携施設での収蔵対応

■連携施設別プール・収蔵実績(令和5年1月31日現在)

施設名	原画数(概算)
石ノ森萬画館	99,000 枚
北九州市漫画ミュージアム	10,000 枚
横手市増田まんが美術館	117,000 枚

プール原画及び収蔵総枚数

約226,000枚

(令和5年1月31日現在)

原画プールにあたっては、原画移管前にMGACと寄託者との間で覚書を交わし、今後の原画の処遇等についての認識も共有した上で対処した。

第3章 実施内容

3.1.3 専門人材の育成

【マンガ原画アーカイブマニュアルについて】

漫画家やプロダクション等、保存者に合った原画の保存方法の研究とマニュアル化を基本方針として、部会員が取材に当たった。今年度は、手塚プロダクションとバロン吉元氏の2者に対して取材を行った。取材を通し、それぞれの現場での保存手法、保存に対する考え方等、これまでの認識に欠けていた部分の多くを補完できたのは、大きな成果であった。今後の「保存者別原画アーカイブマニュアル」の設定に大いに反映したい。

※詳しい取材報告については、付録を参照。

第3章 実施内容

3.1.4 収益事業及び支援体制構築の調査

【「描く人 谷口ジロー展」での「ゲンガノミカタ」展テキストを活用した展示構築について】

開催期間：令和4年6月2日（木）～8月29日（月）

内 容：「ゲンガノミカタ」展のテキストはそのままに、事例の原画を、対応する谷口ジロー氏の作品に入れ替え、その解説を加える形で展示。



図3-8 「ゲンガノミカタ展」を活用した展示の様子（京都）

第3章 実施内容

【佐藤養助漆蔵資料館での「ゲンガノミカタ」展開催について】

開催期間：令和4年10月2日（日）～令和5年1月15日（日）

内 容：MGAC 事務所移転に伴う記念企画として、MGAC 事務所のある佐藤養助漆蔵資料館内にある内蔵の2階を活用して開催。



ゲンガノミカタ展、展示の様子



原画の鑑賞ポイントに合った複製原画を展示して紹介

図 3-9 「ゲンガノミカタ展」を活用した展示の様子（秋田）

第3章 実施内容

3.1.5 「マンガアーカイブ機構（仮称）」設立に向けての原画／刊本事業の合同会議開催

【マンガアーカイブ協議会】

第1回 令和4年4月15日（金）16：30～18：30（オンライン会議）

①今年度マンガ両事業概要について

- ・「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」
- ・「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」

②年間スケジュールについて

- ・「マンガアーカイブ協議会」（合同会議）概要
- ・合同会議年間スケジュール予定の共有
- ・第2回会議の日程調整

〈参加者〉

会議メンバー：吉村和真、イトウユウ、大石卓、鈴木寛之、表智之、ヤマダトモコ

オブザーバー：倉持佳代子、田中千尋、橋本博、日高利泰、三崎絵美、渡邊朝子

文化庁：吉井淳、椎名ゆかり、岩瀬優、奥山寛之、牛嶋興平

事務局：森由紀、池田敬二、岩川浩之、白田彩乃、藤本真之介、佐原一江、横江愛希子、小森愛子

第2回 令和4年6月20日（月）10：00～12：00（横手市増田まんが美術館、オンライン会議）

①今年度マンガ両事業概要と進捗について

- ・「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」
- ・「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」

②「マンガアーカイブ機構（仮称）」の設立に向けた協議

- ・今年度実装に向けた取組について
- ・運営方法について（規約について ほか）
- ・産業界との連携について

株式会社講談社専務取締役 森田浩章氏と「産」との連携に向けた協議

〈参加者〉

会議メンバー：吉村和真、イトウユウ、大石卓、鈴木寛之、表智之、ヤマダトモコ

有識者検討委員：森田浩章

オブザーバー：池川佳宏、橋本博、日高利泰、山元英昌、渡邊朝子、三崎絵美*、田中千尋*

文化庁：牛嶋興平*

事務局：森由紀、池田敬二*、岩川浩之、藤本真之介、佐原一江*、横江愛希子*、

第3章 実施内容

小森愛子*

*印付きはオンライン会議での参加

第3回 令和4年8月5日(金) 16:30~18:00 (オンライン会議)

研修: マンガ原画における漫画家及び所有者からの寄贈・寄託・相続に関する
受入れ館が知っておくべき税務上での知識について

■研修講師

山内康裕 一般社団法人マンガナイト代表理事
一般財団法人さいとう・たかを劇画文化財団理事長
山内真理 公認会計士・税理士 Arts and Law 理事

〈参加者〉

会議メンバー: 吉村和真、イトウユウ、大石卓、鈴木寛之、表智之、ヤマダトモコ
オブザーバー: 池川佳宏、倉持佳代子、田中千尋、橋本博、日高利泰、三崎絵美、山元英昌、
渡邊朝子、岩野浩平、松村祥志、中尾章太郎、高橋颯希
文化庁: 椎名ゆかり、牛嶋興平
事務局: 森由紀、池田敬二、岩川浩之、井上和子、藤本真之介、佐原一江、横江愛希子、
福田佳奈

第4回 令和4年10月14日(金) 15:00~17:00 (オンライン会議)

①マンガ分野データベース構築に向けた勉強会

- ・専門業者(ゲスト)からの会社紹介
※ゲスト: 株式会社スリーエース、早稲田システム開発株式会社
- ・専門業者へのヒアリング及び意見交換

②原画事業・刊本事業の進捗について

- ・熊本大学文学部附属国際マンガ学教育研究センター(RC)
- ・マンガ原画アーカイブセンター(MGAC)

〈参加者〉

会議メンバー: 吉村和真、イトウユウ、大石卓、鈴木寛之、表智之
メディア芸術データベース有識者: 杉本重雄、三原鉄也
ゲスト企業: 株式会社スリーエース 今村大介、増田賢治、藤原巧
早稲田システム開発株式会社 内田剛史
オブザーバー: 池川佳宏、倉持佳代子、田中千尋、日高利泰、三崎絵美、渡邊朝子
文化庁: 椎名ゆかり、奥山寛之、牛嶋興平

第3章 実施内容

事務局：森由紀、池田敬二、岩川浩之、藤本真之介、横江愛希子、福田佳奈

第5回 令和4年12月10日（土）10：00～11：40（熊本大学、オンライン会議）

①今年度の事業進捗共有と将来の展望について

- ・「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」
- ・「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」

②「マンガアーカイブ機構（仮称）」設置構想について

- ・組織体制についての協議
- ・両事業の統合へ向けてのスケジュール検討

〈参加者〉

会議メンバー：吉村和真、イトウユウ、大石卓、鈴木寛之、表智之、ヤマダトモコ*

オブザーバー：池川佳宏、倉持佳代子*、橋本博、日高利泰、渡邊朝子*

文化庁：牛嶋興平*

事務局：森由紀*、藤本真之介、佐原一江*、横江愛希子*、福田佳奈*

*印付きはオンライン会議での参加

第6回 令和5年2月1日（水）15：50～17：30（オンライン会議）

①今年度マンガアーカイブ協議会の振り返り

- ・第一回：キックオフミーティング
- ・第二回：講談社専務取締役 森田浩章氏と「産」との連携に向けた協議
- ・第三回：マンガ原稿関わる税務研修
- ・第四回：マンガ分野データベース構築に向けた勉強会
- ・第五回：「マンガアーカイブ機構（仮称）」設置構想について

②「マンガアーカイブ機構（仮称）」設置構想について

- ・組織体制についての協議
- ・今後の計画について

〈参加者〉

会議メンバー：吉村和真、イトウユウ、大石卓、鈴木寛之、表智之、ヤマダトモコ

オブザーバー：池川佳宏、田中千尋、橋本博、日高利泰、渡邊朝子

文化庁：椎名ゆかり、牛嶋興平

事務局：森由紀、池田敬二、藤本真之介、佐原一江、横江愛希子

第3章 実施内容

3.2 実施会議内容

3.2.1 運営協議会

第1回 令和4年6月13日（月）18：30～20：30（オンライン会議）

- ①令和4年度マンガ原画アーカイブセンターの事業内容について
- ・事業計画、年間スケジュールの確認

②MGAC 運営に関する情報共有及び協議

- ・相談件数及び内容の確認
- ・プール事業について

〈参加者〉

会議メンバー：吉村和真、イトウユウ、大石卓、表智之、ヤマダトモコ、池川佳宏

オブザーバー：鈴木寛之

事務局：森由紀、池田敬二、岩川浩之、藤本真之介、佐原一江、小森愛子

第2回 令和5年2月1日（水）14：00～15：40（オンライン会議）

※「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」
との合同会議を実施

①各部会の今年度取組状況報告

- ・収益部会、マニュアル部会、ネットワーク部会の取組
- ・R4年度原画プール実施状況
- ・今後のマンガ原画アーカイブセンター事業の方向性について

②刊本 AC 設置準備委員会

- ・今年度取組状況報告
実装化に向けた調査研究、ネットワーク所蔵リスト、刊本プール
- ・今後の刊本事業の方向性について

③今後の原画・刊本事業の連携について

〈参加者〉

会議メンバー：吉村和真、イトウユウ、大石卓、表智之、ヤマダトモコ

オブザーバー：鈴木寛之、橋本博、日高利泰、池川佳浩

文化庁：牛嶋興平

事務局：森由紀、池田敬二、藤本真之介、佐原一江、横江愛希子

第3章 実施内容

3.2.2 各部門実施会議内容

【マンガ原画アーカイブネットワーク会議】

第1回 令和4年7月15日（金）10：30～12：00（オンライン会議）

①今年度の取組について

- ・事業実施計画の確認
- ・マンガ原画アーカイブセンターの実施状況について

②各参加団体からの近況報告

- ・横手市増田まんが美術館、石ノ森萬画館、明治大学米沢嘉博記念図書館
京都国際マンガミュージアム、青山剛昌ふるさと館、北九州市漫画ミュージアム
湯前まんが美術館

③第2回マンガ原画アーカイブネットワーク会議の開催について

〈参加者〉

会議メンバー：吉村和真、イトウユウ、大石卓、表智之、岩野浩平、木村仁、
斎藤宣彦、隅淳子、河崎積

文化庁：椎名ゆかり、牛嶋興平

事務局：森由紀、池田敬二、岩川浩之、藤本真之介、佐原一江、福田佳奈

第2回 令和4年11月4日（金）15：00～17：00（鳥取県北栄町役場、オンライン会議）

①今年度の取組について

- ・マンガ原画アーカイブセンターの実施状況について
- ・MGAC 事務所移転について
- ・原画プール実績について

②各参加団体からの近況報告

- ・横手市増田まんが美術館、石ノ森萬画館、明治大学米沢嘉博記念図書館
京都国際マンガミュージアム、青山剛昌ふるさと館、北九州市漫画ミュージアム
湯前まんが美術館

③ネットワーク会議についての協議

- ・来年度ネットワーク会議について
- ・ネットワーク会議の運営体制について

〈参加者〉

会議メンバー：吉村和真、イトウユウ、大石卓、表智之、岩野浩平*、木村仁*、倉持佳代子、

第3章 実施内容

隅淳子

オブザーバー：松本裕実、前田雅美、河崎積、内間凜

文化庁：椎名ゆかり*、奥山寛之*、牛嶋興平*

事務局：森由紀*、池田敬二*、藤本真之介、佐原一江*、福田佳奈*

*印付きはオンライン会議での参加

【マンガ原画アーカイブマニュアル検討会議】

第1回 令和4年6月20日(月) 13:30~14:30 (横手市増田まんが美術館、オンライン会議)

●今年度の取組について

- ・今年度実施計画の確認
- ・旧マンガ原画アーカイブマニュアルの改定について
保存者別マニュアル作成方針について
マニュアル作成に関する取材について

〈参加者〉

会議メンバー：池川佳浩、ヤマダトモコ

文化庁：吉井淳*、岩瀬優*、牛嶋興平*

事務局：森由紀、池田敬二*、岩川浩之、佐原一江*、小森愛子*

*印付きはオンライン会議での参加

第2回 令和5年1月26日(木) 14:00~15:30 (オンライン会議)

①今年度の取組について

- ・保存者別保存マニュアル作成のための取材について報告
手塚プロダクション、バロン.プロ (エ☆ミリー吉元氏)

②報告書の記載について

- ・今年度実施報告書への活動内容の記載について

③今後の活動方針の協議

- ・「保存者別マンガ原画保存マニュアル」の作成について
- ・発行媒体や仕様・規格など

〈参加者〉

会議メンバー：大石卓、池川佳浩、ヤマダトモコ

事務局：池田敬二、佐原一江、福田佳奈

第3章 実施内容

4) 収益・支援体制構築会議

第1回 令和4年12月10日(土) 17:30~18:30 (熊本大学 国際マンガ学教育研究センター)

① 「ゲンガノミカタ」展小冊子作成について

- ・ 構成内容の協議
- ・ 規格、仕様、作成部数等の確認
- ・ 表紙等デザインについて
- ・ 頒布方法ほか

② 「ゲンガノミカタ」展情報共有

- ・ 京都「谷ロジロー展」での活用事例
- ・ MGAC 新事務所、漆蔵資料館での企画開催事例

〈参加者〉

会議メンバー：吉村和真、イトウユウ、表智之、大石卓

第2回 令和5年1月24日(火) 10:00~11:30 (オンライン会議)

① 「ゲンガノミカタ展」小冊子作成について

- ・ 規格、仕様、作成部数等の確認
- ・ テキスト等内容について
- ・ 頒布方法ほか

② 「ゲンガノミカタ」展活用事例について

- ・ 京都国際マンガミュージアム
企画展「描くひと 谷ロジロー展」における「ゲンガノミカタ」活用事例
- ・ 佐藤養助漆蔵資料館
「ゲンガノミカタ」展の開催について

③ 今後の収益事業についての情報共有並びに方針等の協議

- ・ 今年度事業報告書への記載内容の確認 ほか

〈参加者〉

会議メンバー：イトウユウ、表智之、大石卓

事務局：森由紀、池田敬二、佐原一江、福田佳奈

付録

1 「ゲンガノミカタ」小冊子（一部抜粋）



図1 「ゲンガノミカタ」小冊子表紙（案）

1

観方の

原画と印刷、どう違う？

世界的にみると、マンガの掲載メディアは様々です。オールカラーがモノクロか、豪華なハードカバーがパンフレット状の小冊子か…。様々なあり方の中で日本では、モノクロ印刷を主体とした安価な雑誌に特化する方向で、マンガのメディアも表現も発達してきた歴史があります。

そのため日本のマンガは、印刷物としての質はあまり高くありません。コストも速度も効率の高い「活版印刷」で、早く、安く、膨大な量を印刷し製本し、長い日本列島の端から端まで旬刊や月刊発行に継続を続ける。これが、日本マンガの産業としての基本であり、強みなのです。

その結果、マンガ家が描いた原画の微妙なニュアンスが雑誌の紙面で再現できないという事象が残念ながら起こります。単行本ではもう少し繊細な印刷ができる場合もありますが、美術書のような高クオリティは望めません。マンガ家が本誌に表現したかったイメージは、原画を直に鑑賞することこそが体験できないというのが、しばしばあるのです。

その一方で、原画と印刷のギャップを逆手にとった子どろっこりな、黒で塗りつぶすことを「くま」と言いますが、これを墨汁で塗りなくするのは結構な手間がかかります。しかし活版印刷では微妙な濃淡は印刷に出ませんから、塗り感覚にせず手早く塗る。まだ、墨汁でなくマシツクリペンを使うとさらに時間を節約できます。

矢口 高雄 徳島県小豆島町生まれ、高校卒業後、松本銀行に勤務しつつ『月刊漫画ガロ』へ投稿を開始、69年『長閑な夜』などが掲載され、期行を返国し上京。「飯」や「おとこ道」(雑誌一稿一原付)を経て、73年『30の娘が子へ』、『釣りキチ三平』がヒット、第5回講談社出版新人賞を受賞する。76年に『マサキ』で第5回日本漫画家協会賞大賞受賞。2000年、文芸春秋で『地球文化の歩き方』を刊行。後半中絶日本人が苦悩するの物語を、石ノ森章太郎の傑作を模範に、2000年、絶筆。

▼矢口高雄『釣りキチ三平』
刊行：『週刊少年マガジン』(講談社)
1971年～1983年
カラー版の「にじみ」は、当時の印刷では、そのニュアンスが再現しづらかった。

図2 「ゲンガノミカタ」小冊子 解説ページ (案、一部抜粋)

2 保存者別原画アーカイブマニュアル作成のための取材報告書

2.1 株式会社手塚プロダクションへの取材報告書

メディア芸術連携基盤等整備推進事業分野別強化事業マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究

原画アーカイブマニュアル作成のための取材 報告書

令和4年度 第1回：プロダクションへの取材

取材先：田中創（たなか・はじめ／手塚プロダクション資料室）

鈴木美香（すずき・みか／手塚プロダクション著作権事業局 営業2部 イベント事業課）

場所・日時：手塚プロダクション第1スタジオ埼玉県・新座市

令和4年12月13日 14:00～15:30

取材者：本事業マニュアル部会員2名

池川佳宏（熊本大学文学部附属 国際マンガ学教育研究センター特定事業研究員）

ヤマダトモコ（明治大学 米沢喜博記念図書館展示担当）

【目的】

『メディア芸術連携促進事業・連携共同事業 マンガ原画に関するアーカイブ（収集、整理・保存・利活用）および拠点形成の推進実施報告書』（学校法人 京都精華大学・2019年2月）掲載のマニュアルは、基本的に参加施設にとってのマニュアルであった。今後更にマニュアルを作成していく場合、実際に原画を扱っている他の多くの方たちを考慮した内容として積み上げられれば、原画を整理したいと考える多くの方が参照できる汎用性の高いものとなるだろう。

そのためには、原画を所蔵する出版社、作家、プロダクションなどが現在どのような整理管理を行い、今後どのように保存・管理したいか、また、現在どのような問題を抱えているかなどをより具体的に知ってから積み上げた方がよい、という意見に基づき取材を行う運びとなった。

この取材は、現在そして今後原画を扱う施設にとって、所有者や、版權管理を代行してきた方々の要望等を知り、施設の側がより良い展望のもと管理を行っていくための基礎となることをも目指している。

【取材先について】

2回目は、日本マンガ界最大の巨匠・手塚治虫作品の著作権管理とアニメーション制作を主な業務とする企業・手塚プロダクションへの取材である。企業の中の一部としてマンガ原画を保存し活用している場所だ。第1スタジオはアニメ制作スタジオであり、資料の保管庫でもある。アニメのセル、プロダクションが関わった出版資料などとともに、手塚治虫の原画もここに保管されている。

田中創氏は、手塚プロダクションの資料室の担当者。鈴木氏は同企業の展示などイベント担当者で

付録

ある。両名とも手塚治虫の原画を扱うが、それ以外の多くの業務をこなす立場の方たちだ。今回の取材は原画の保存管理者の田中氏をメインに、活用面での話を鈴木氏が補足するという形で行われた。



手塚プロダクション第1スタジオ外観及び田中創氏 (図版)

【取材内容】

◆前提

田中氏は、手塚治虫の没後の1989年11月に入社。手塚治虫ファンクラブの会報にあった『手塚治虫漫画全集』（講談社）の第4期編集のための募集に応募した。没後の刊行であるため、直接手塚治虫と仕事をしたことはない。前資料室長の森晴路氏は1977年刊行の『手塚治虫漫画全集』第1期刊行の際に入社し、当時資料室にはスタッフが4人いた。

◆所蔵枚数とサイズ

- ・枚数：約8万枚。

手塚治虫は約15万枚の原稿を描いたと言われているが、紛失や譲渡（手塚治虫が生前、ファンなどに向けて行っていたが、現在は行われていない）、手塚自身での切り貼りなどのため手塚プロダクションが管理しているのはこの枚数。

- ・サイズ：原画は主にB4サイズ。初期のものにはそれより小さいものも多い。マンガ雑誌以外の掲載も多いため、サイズの縦横比は異なるものもある。

- ・デジタルデータの保管：資料室の担当ではない。別の場所で行っている

付録

◆保存

・保管場所：温湿度管理のある専用の保管庫で保存している。1996年に備え付けた。銀行の金庫のような大きな扉のある保管庫で、防火機能がある。

手塚先生の御親族が阪神淡路大震災の後に原稿の保存を危惧されたことがきっかけで震災の翌年出来上がった。それまでは新座スタジオの室内にあり、温湿度管理も行っていなかった。

・人員：保管整理の人員は現在田中氏1人。近々2名増やす予定。

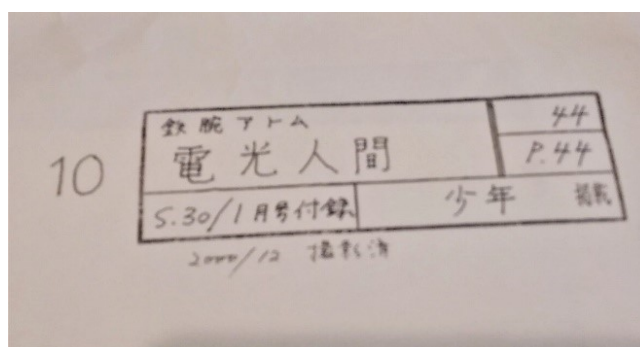
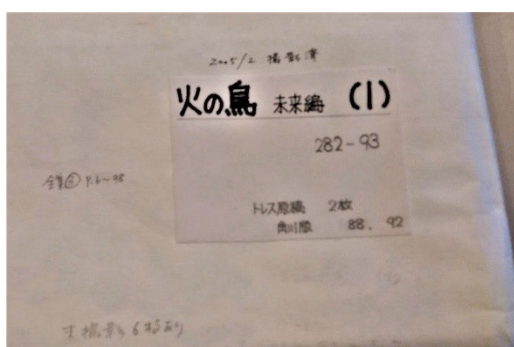
・保存方法：一般封筒に原画を重ね封入し、ラックに横置きで保存。中性紙の封筒や間紙[あいし]を入れるなどは行ってない。見積りを取ったことはあるが、高額なため諦めた。ラックも普通のラックである。

・修復：修復は主に資料室で行っている。無酸のテープを使用。これは展示担当者（鈴木氏）よりの助言で行うようになった。それ以前は、原画と同じ紙を使い通常の接着剤などを使用していた。出先で修復しなければいけない場合、展示担当者が行う場合もある。

没後大量に出版された際は原稿入稿だったため、修正の機会がとても多かった。セロセーブの糊[のり]あとは消しゴムをかけるとうまく取れることもあるので使うが、手塚治虫が使用していたマンガ原稿用紙は薄く、消しゴムをかけるとおそれがあるため慎重に行う必要がある。

・保管上の工夫：作品ごとにまとめた封筒の表書きには、作品の何ページから何ページまでが入っているかなどの情報を書き込んでいる。最初は作品タイトルのみ入っていたが、田中氏が後に追加していった。

・改変原稿の残りの管理：手塚治虫は単行本時の原稿の改変が多く、自身の切り貼りの結果が最終原稿になっている場合の多さで有名だが、その切り取ったあとの原稿（コマ）もある程度保管している。例えば「鉄腕アトム」の場合は1話ごとに袋に入っている。1989年の時点で既に仕分けられていた。



手塚治虫マンガ原画整理用封筒 表書きの例 (図版)

付録

◆活用

・現状：大きくは出版と展示で利用する。展示では外部との窓口が鈴木氏、出版では出版局が窓口となり資料室とやり取りをしている。資料室では外部に対する判断はしない。

手塚没後 30 年以上経 [た] つが、手塚関係の新刊が出なかった年は一度もない。

・管理：社内手続として情報管理・共有のために原稿の貸出時には、必ず原稿のコピーを取りどこへ貸し出したかを書き、抜き出した元の場所に置いている。手間ではあるが重要な作業。

・出版：初出バージョンでの復刻など高価な復刻本や大判本ではマンガ原画を使用している。通常の出版物では講談社の『手塚治虫漫画全集』400 巻をデータ化したものを使用することが多い。

・展示：(主に鈴木氏による回答)

手塚治虫記念館の企画展などもあるため、少なくとも年に 3～5 回は、展示のために資料室からの原画出納がある。今どの展示で使用しているかなどは、資料室が記録し管理している。

あらかじめリクエストの多いものを中心に、300 枚ほどパッケージし額に入れるなどして別の保管庫で管理している。

現在では美術館環境のないところには短期であっても貸出しをしない。

展示に使用される際は海外であっても、運搬から自身でハンドキャリーし、展示もする。展示環境の確認と原画の保存状態維持のため。

催事場展示では、行ってみると紫外線対策などがされていない場合がある。また、海外では気候も含め現地に行かないとわからないことが多い。そのため、国内外問わず、事前に現地調査を行った上で、展示の可否の判断をしている

原画に添えるデータに関しては、特に海外の展覧会ではマンガ原稿の初出表記にこだわるケースが多いが、手塚原画は改定も多く悩ましい。描き直しだけでなく、切り貼りして作成された「鉄腕アトム」の原画などは、コマごとに初出が違うため、調査を依頼されても、すべてキャプションとして記述するとデータ量が増えすぎて難しいため、諦めていただくケースも多い。連載期間を掲示して代わりとする場合もよくある。

・デジタルデータ：データ化は別部署で行っているため、正確なところはわからないが、2001 年に DVD-ROM が発売されたので、それ以降よく使用されるようになった。2001 年のデータは講談社『手塚治虫漫画全集』400 巻の B6 単行本をデジタル化したものなので、拡大すると粗さが目立つ。復刻本での再デジタル化や使えなくなった言葉の訂正なども必要なため、デジタル版も適宜ブラッシュアップしている。その他のデジタルデータ化は出版社が行い、その後プロダクションに渡される場合もある。1990 年代後半のマンガ文庫ブーム頃まではマンガ原稿のみを使用していた。

なお講談社の『手塚治虫文庫全集』200 巻の出版はデジタルデータではなく、前述の講談社全集 400 巻のフィルムを使用している。

付録

◆今後の課題

・人員の確保。先にも述べたが、2人増員予定。資料室は原画だけでなく、基本的に出版物も併せた紙資料を担当している。出版物（単行本）や掲載雑誌の管理もしている。赤本時代の単行本も、手塚治虫が所持していたものや寄贈されたものがある程度ある。その後の出版物などもあわせて、書架があふれて大変な状態である。

・原画のデータベース化なども今後の課題。単行本はある程度リスト化・書影画像がデータ化されている。そのデータから原画の封筒を探すこともできるが、原画そのものは封筒管理のみである。

・マンガ作品だけでなく、他者制作の年表等のチェックや、手塚治虫の発言などのリサーチ、例えばテレビ局から「手塚治虫がどこかでこういうコメントしていたが出典を教えてください」といった質問なども、資料室に回すケースが多い。しかし、個人（現在は田中氏）の知見に頼る形になっている。これらテキストデータの情報の調査法や、情報そのもののオープンな共有財産化も、プロダクションのみでできる事業ではなさそうだが、今後の課題だろう。

◆その他の質問

Q：たくさんの業務の中から、原画保存と活用に関しする部分を聞かせていただけたが、プロダクションのメリットを感じられることはあるか。

A：やはり担当の人員がおり、温湿度管理のある場所がある状況はメリットと考える。

Q：見学対応などで、原画の保存法をたずねられる機会がよくあると思うが、原画について啓発活動などをなさっていたりするか。

A：プロダクションとして原画の管理方法などを聞かれるケースなどは案外少ない。漫画家同士で個人的に情報共有していることはあるのかもしれないが。

前資料室長の森晴路が『手塚治虫 原画の秘密』（手塚プロダクション編 新潮社 2006年）で、原稿の改変や切り貼りについて解説した本を出版し、本の内容を基に「手塚治虫原画の秘密展」（2007年）を開催したりした経験がある。あれは、啓発活動と言えるかもしれない。

また、啓発とは少し違うが、社として原画の真贋 [しんがん] の鑑定はしないのを決まりとしている。それが社の仕事として増えるのは違うと思うし、真贋の判定自体が野暮 [やぼ] であるとの見方もある。これに関しては、テレビ局や美術館の依頼もお断りしている。

以上。

2.2 エ☆ミリー吉元氏への取材報告書

メディア芸術連携基盤等整備推進事業分野別強化事業マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた 調査研究

原画アーカイブマニュアル作成のための取材 報告書

令和4年度 第2回：マンガ原画の整理を担う個人への取材

取材先：エ☆ミリー吉元（えみりー・よしもと／バロン吉元マネージャー、アーティスト、リイド社トーチ web 編集者）

場所・日時：明治大学 米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館

令和4年12月13日 17:30～19:00

取材者：本事業マニュアル部会員2名

池川佳宏（熊本大学文学部附属 国際マンガ学教育研究センター特定事業研究員）

ヤマダトモコ（明治大学 米沢嘉博記念図書館展示担当）

【目的】

『メディア芸術連携促進事業・連携共同事業 マンガ原画に関するアーカイブ（収集、整理・保存・利活用）および拠点形成の推進実施報告書』（学校法人 京都精華大学・2019年2月）掲載のマニュアルは、基本的に参加施設にとってのマニュアルであった。今後更にマニュアルを作成していく場合、実際に原画を扱っているほかの多くの方たちを考慮した内容として積み上げられれば、原画を整理したいと考える多くの方が参照できる汎用性の高いものとなるだろう。

そのためには、原画を所蔵する出版社、作家、プロダクションなどが現在どのような整理管理を行い、今後どのように保存・管理したいか、また、現在どのような問題を抱えているかなどをより具体的に知ってから積み上げた方がよい、という意見に基づき取材を行う運びとなった。

この取材は、現在そして今後原画を扱う施設にとって、所有者や、著作権管理を代行してきた方々の要望等を知り、施設の側がより良い展望のもと管理を行っていくための基礎となることをも目指している。

【取材先について】

第3回目は、漫画家・バロン吉元氏の息女エ☆ミリー吉元氏への取材である。エ☆ミリー氏はプロダクション（バロン.プロ）スタッフの肩書を持つが、自宅にマンガ原画のある暮らしを実践し、マネージャーとしてバロン氏の創作以外の仕事を全面的に担う漫画家の家族である。

漫画家の近親者がマネージャー業を兼ねる例はそれなりにあるが、エ☆ミリー氏は「漫画原稿のある暮らし双六 [すごろく]」（※後述）を自作するほど原画保存への関心が高い。

付録



エ☆ミリー吉元氏、於：明治大学 米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館 2階閲覧室（図版）

【取材内容】

◆前提

エ☆ミリー氏は女子美術大学の4年生だった頃、倉庫で父・バロン吉元氏の原画を発見し、父の作品を原画で初めて読んだ。その絵力に衝撃を受けた経験がきっかけで、大学院への進学をやめ自身の作家活動と並行して父のマネージャーとなり、原画の整理・保存を決意したという。整理保存作業は大学を卒業した2015年より開始した。

◆所蔵枚数とサイズ

- ・枚数：約3万枚以上。

過去に発行された単行本（復刻版や新装版などの再販分を除く）の総ページ数だけでも33,000ページ以上あるため、単行本化されていない作品も合算すると、最低でも3万枚以上はあると推測。一部作品で紛失しているものもあるが、貸本時代のものも含めほぼ残されている。

原画が残っているのは、アシスタント先の師匠に当たる横山まさみち先生から「ちゃんと原画は出版社へ『返して』と言った方がいい」とアドバイスされていたためである。

- ・サイズ：原画は主にB4サイズ。初期に描かれた貸本向けの作品にはそれより小さいものも多い。

◆保存

・保管場所：エ☆ミリー氏の自室内。高さ約2メートルのキャスター付きスチールラックを4台組んで原稿の入ったボックスを収納し、置ききれない分は押し入れに。温湿度計を頻繁にチェックし、温度管理はエアコンで、湿度管理には除湿器を使っている。

付録

・人員：エ☆ミリー氏 1 人。原稿管理は肉体労働であるため、父（バロン吉元）には安全面から作業に関わらないよう伝えている。

・保存方法：茶封筒や出版社から返却されたときの原稿袋に入ったままの状態です。フタ付き文書保存箱に入れているものと、原画と原画の間に中性紙の間紙を入れ、中性紙の封筒に入れ、中性のアーカイバルボックスに保管しているものがある。

アーカイバルボックスには主に代表作である「柔侠传」シリーズの単行本 41 巻分（1 巻あたり 300 ページ前後）が保管されている。1 箱に 1 巻分を収納。単行本 1 巻分の原画は 5 キロぐらいの重さ。アーカイバルボックスは 3～4 段に積み重ねている。

・保存知識の学習先：美大出身なので、授業で作品保存の大切さは学んでいた。

原画管理を始めた 2015 年当初は、封筒にも入っていない状態でダンボール箱に収納されていた生原稿から優先的に、単行本と照らし合わせながらページをストーリーの順に並べ直し、1 話ずつ分けたものを茶封筒に入れ、扉絵やカラーページを中心にスキャンをしていた。

中性紙やアーカイバルボックスの使用などは、2020 年頃から始めた。具体的な整理方法についてネットで検索し、資料保存用品を扱っている株式会社 TT トレーディングに直接問い合わせた。

株式会社 TT トレーディングは基本的には法人との取引を中心に行っているとのことだったが、取り扱う製品は美術館でマンガ原画に使用されている例もあり、個人の漫画家やその家族がどのように生原稿を管理しているのかについて、エ☆ミリー氏がバロン.プロでヒアリングを受け、同時にマンガ原稿の基本的な保存方法についても教わった。

2020 年に、より専門的な保存法を模索し始めたのは、コロナ禍の影響で企画していた国内外での展覧会が相次いで中止・延期となり、それまでは忙しさゆえに少しずつしか進めることのできなかった原稿整理に集中的に取り組む時間ができたため。

同氏が企画もしくは関係した展覧会を通して出会った業者から知識を得る場合もある。

例：株式会社大入、ヤマト運輸株式会社東京美術品支店

・保管上の工夫：上述のようにアーカイブの知識を基に保管している以外には、固めの床敷きの上にキャスター付きのスチールラック複数台を、前後に重ねて設置。ラック上の奥に収納されたボックスも出納しやすくするため、それぞれ移動できるようにしている。

初めは床に敷かれた絨毯 [じゅうたん] の上にじかにラックを組み立てたが、置いた原稿の重さによってキャスターが絨毯にめり込んでしまい、動かせなくなった。そのため再度ラックを解体し、今度は絨毯の上に丈夫な竹製のラグマットを敷いてキャスターの動きを改善。また、地震時にラックからの箱の落下を防ぐため、段ごとに飛び出し防止用のフック付きロープを上下に引っ掛けて対策している。また、押し入れには湿度調整のため、すのこを敷いている。

付録

・原画以外の資料の保存：刊行された単行本は父の部屋にあるが、温湿度や紫外線対策はしていない。貴重かつ劣化の激しい貸本は原画とともに自室にて管理。貸本時代の作品に関しては、手元にある単行本よりも、原画の方が揃 [そろ] っている状況。

◆活用

・現状：出版と展示で利用する。展示用の図録を作る際も使用する。先に記したように、整理・管理・活用すべてエ☆ミリー氏が行っている。

・貸出し：原画の貸出しについては、初めての方の場合はまずは企画趣旨や詳細を聞き、父と相談の上、総合的に信頼できると感じた場合には貸し出す。展示の場合はスタッフへの手渡し、自身の手で会場に持参する場合もある。設営は先方に任せる場合や、要望があれば展示会場へ行き、自身で設営やディレクションを担う場合もある。先方の状況によって臨機応変に対応する。

原画の貸出しの可否については、まずは企画自体の趣旨や、人と人の信頼関係を重視し、展示会場の環境等について一律の条件は設けていない。

貸出しに関してだけでなく、法務上の知識などについては、知人の弁護士や、漫画家を身内に持つ方たちより教わることもある。

・初出調査：画集や復刻本の出版の際には必ず行うようにしている。初出の記載を重要と思ったきっかけは、漫画家の山田参助さんと画集『バロン吉元 画俠伝 ArtWork Archives』を共に編集した際に頂いた助言。「画集に、収録作品の初出や年表などの資料性の高いデータが入っていると、作家の技術的な魅力や作品の時代的価値を俯瞰 [ふかん] できて、本自体の質の向上を感じる」とおっしゃっていた。

また、1960年代から1970年代にかけて連載された作品は、マンガ誌への掲載から時間が経ってから単行本が発売され（時には連載時のマンガ誌と単行本の版元が異なる場合もある）、単行本の発行日と初出が大きく離れているケースもあるので、作品自体の制作時期を明確に記した方がよいと考えている。（例えば、商業誌デビューの直後の1960年代に描かれたアメコミ調の読み切り作品が、数年後、その執筆時とは既に絵柄の異なっている他作品の単行本巻末に、特典として収録されているケースもある。）

前述の画集編集時には、平成28年頃にメディア芸術データベース（以下、MADB）で、『週刊漫画アクション』の目次データが順次公開されていたため、掲載情報を参考に初出の特定作業をした。当初は国会図書館へ行き、バロン吉元のファンサイトで公開されている作品リストと照らし合わせながら調査していたが、MADBの活用法を知ってから作業の負荷が大きく軽減された。

未来の研究者が過去を振り返ったときに、この年にこの作品がこの媒体で発表されていた、という正確な情報をスムーズに調べられ、掲載誌を確認できるのは、体系的なマンガ史の形成においても非常に重要だと思う。

付録

・デジタルデータ：スキャンデータがあれば手元に原画を取っておかなくてもよいとする考えもあるが、フォーマットの乗換えやスキャン技術の発達、またデータそのものや電子機器の脆弱〔ぜいじやく〕性を踏まえると、デジタル化すれば生原稿の保存問題が解決できる訳ではないと考えている。紙の原画からでしか得ることのできないアナログ作画ならではの諸情報も詰まっており、紙そのものの保存を重視している。

また、どこまでをマンガ原稿の資料としてとらえ保存をするべきかという観点については、原画の入っていた袋（出版社からの原画返却時に原稿が入れられていた封筒類）には、物によっては宛名や作品名だけでなく、編集部や印刷所での指示書きを初めとした当時の現場の様々な情報が盛り込まれているため、そこまでを資料として保存している。

◆今後の課題

・マンガ原画を未来へどう遺〔のこ〕していくかという保存問題に関しては、業界内での横のつながりが希薄な漫画家やその家族が、1人で悩みを抱え行き場を失う事態のないよう、同じく保存問題に直面している様々な当事者のケースの「発信」活動に意義があると考えている。

一方で、保存問題の根本的な解決策として、将来的にマンガ原画の保存機能を有した施設整備を強く願う身としては、関係者の間に限られた業界内での共有にとどまらず、一般の方への周知や、本件への関心を広く持ってもらい働きかけも大事だと思っている。自身も、今後もクリエイティブな形でマンガ原画の保存問題に関しての発信を継続していきたい。

・「漫画原稿のある暮らし双六」（作・エ☆ミリー吉元）について：本双六も、「発信」の一環としての、エ☆ミリー氏の制作物と言える。

「暮らし双六」としたのは、所蔵館や研究者の立場とは別に、漫画家やその家族にとっては、マンガ原画の存在は〔いや〕否が応でも日常の一つにあり、それによって生活がひっ迫される、「暮らし」の一部であるという意味を込めた。

制作のきっかけは、令和4年4月から5月にかけて銀座蔦屋書店で開催された「漫画原稿と漫画制作の未来を考える一生原稿の保存・管理」の展示。

マンガ原画の保存問題に直面する当事者として、自身の状況を一つのケースとして例に挙げ、マンガ原稿がある暮らしとは一体どういうものなのか、そもそもどのような経緯で父親の制作した生原稿に興味を持ち「未来へ遺したい」と思うに至ったのか、原稿を管理するに当たって大変なこととは何なのか、といったことを双六形式で表現。双六にしたのは、一つ一つのエピソードを長文で説明せず、書店に立ち寄った客でも気軽に読めるメリットを意識しつつ、コマを追っていきながら自身の経験を時系列で追体験してほしいと考えたためである。

マンガ的なコマで進む形でもあり、整理・保存作業の、進んだり戻ったりという実態も表現できた。最初は「一回休み」が多くなりすぎて省略したほど。

初めは自身の姿を写實的に描いていたが、苦勞する自分を描くことに気が進まずにいたとき、父が手元の紙にササッとエ☆ミリー氏に似せたキャラクターを描いた。それを元にして生まれたのがエ

付録

ホッシーちゃん。名前は、エ☆ミリーの「エ☆」が元になっている。

岡本一平の双六をモチーフにした。岡本一平に興味を持ったのは、平成 24 年に小野耕世さんから内覧会のお誘いがあり訪れた、川崎市岡本太郎美術館の「小野佐世男・モガ・オン・パレード」展で、小野佐世男との関係性を知った経験がきっかけだった。その後、令和 4 年に母（吉元れい花・刺繍 [ししゅう] 作家）が第 25 回岡本太郎現代芸術賞にて大賞である岡本太郎賞を受賞したため川崎市岡本太郎美術館へ度々訪れるうちに、岡本一平・かの子夫妻の展示を見て、改めて岡本一平の絵のよさを認識した。

かつて挿絵画家を目指していた父がコレクションしていた、戦前から戦後にかけての様々な大衆雑誌が身近にあったため、こうした図柄が元々好きだったこともある。



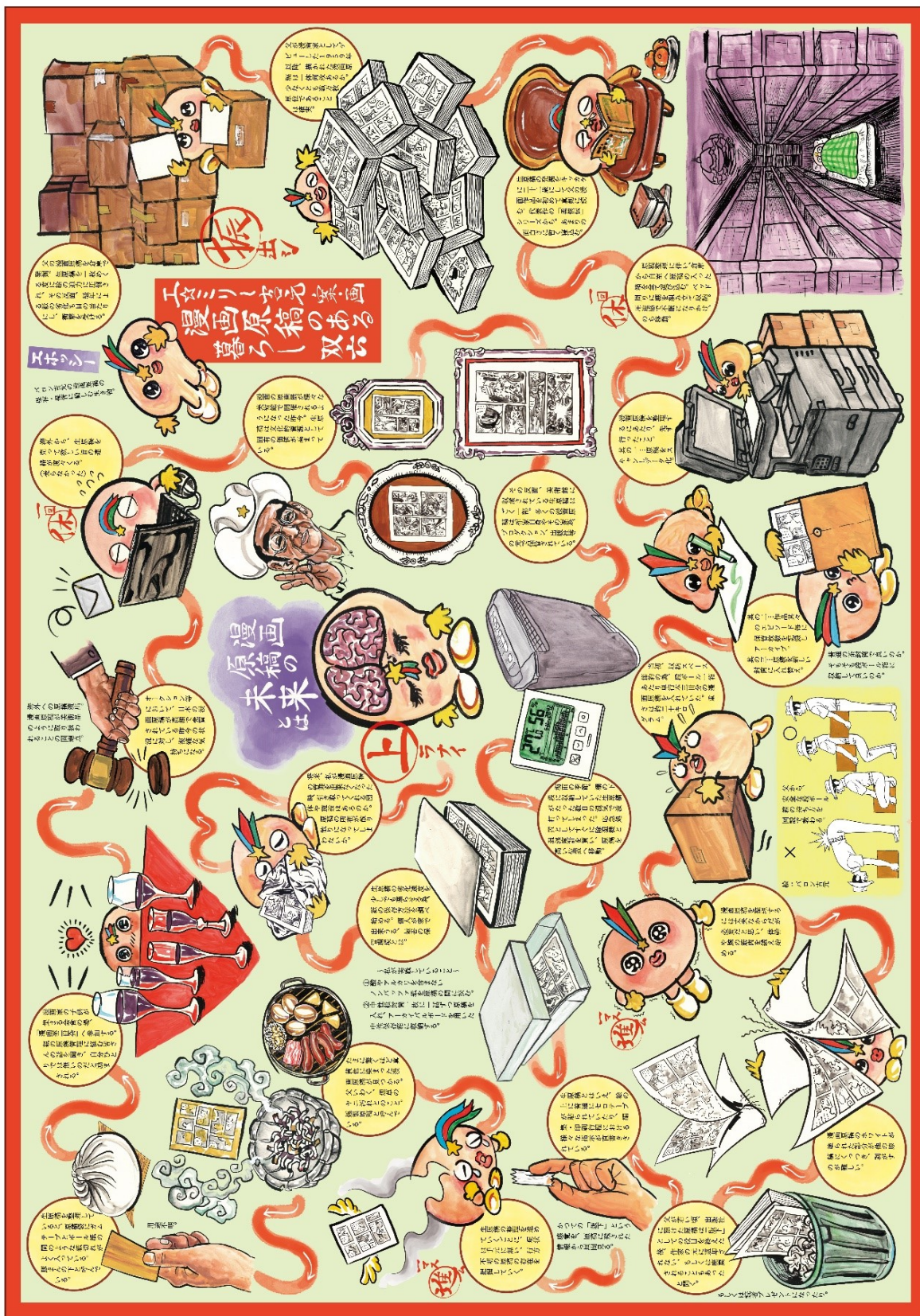
「漫画原稿のある暮らし双六」とエホッシーちゃんの立体像
(制作・エ☆ミリー吉元) (図版)

双六にはエホッシーちゃんがマンガ原画の整理保管に奮闘する様子が描かれる。

立体像は、口が少し開いている。銀座蔦屋書店での展示時に来場者がコメントを投函できるようにするためであった。

※双六の大きめの図版を本報告の最後に掲載。

以上



本報告書は、文化庁の委託業務として、大日本印刷株式会社が実施した令和4年度「メディア芸術連携基盤等整備推進事業 分野別強化事業」の成果をとりまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。
転載複製等に関する問い合わせは、文化庁にご連絡ください。